



笑いと

Le livre du rire et de l'oubli

忘却の書

ミラン・クンデラ / 西永良成 訳

Milan Kundera

笑いと

Le livre du rire et de l'oubli

忘却の書

ミラン・クンデラ / 西永良成 訳

Milan Kundera

集英社

LE LIVRE DU RIRE ET DE L'OUBLI
Original title :
KNIHA SMICHU A ZAPOMNĚNÍ
by
Milan Kundera
Copyright © 1978 by Milan Kundera
Japanese translation rights arranged with
Éditions Gallimard, Paris
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

笑いと忘却の書

一九九二年四月二五日 第一刷発行

著者 ミラン・クンデラ

訳者 西永良成

編集 株式会社綜合社

一〇一 東京都千代田区神田神保町三―六―五
電話 (〇三) 三三三九―三八―一

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

一〇一 五〇 東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話 編集部 (〇三) 三三三〇―六〇九四

販売部 (〇三) 三三三〇―六三九三

制作課 (〇三) 三三三〇―六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

©1992 Shueisha

本書の内容の一部または全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作課宛にお送りください。送料小社負担でお取り替えます。

笑いと忘却の書

目次

第一部 失われた手紙

5

第二部 お母さん

39

第三部 天使たち

79

第四部 失われた手紙

III

第五部 リートスト

167

第六部 天使たち

221

第七部 境界

271

訳者あとがき 西永良成

321

装画 山本容子
装幀 坂川栄治

第一部

失われた手紙

一九四八年二月、共産党指導者クレメント・ゴットワルトは、プラハのバロック様式の宮殿のバルコニーに立ち、旧市街の広場に集まった数十万の市民に向かって演説した。それはボヘミアの歴史の一大転回点、千年に一、二度あるかないかの運命的な瞬間だった。

ゴットワルトは同志たちに付き添われていたが、彼の脇の、ほんの近くにクレメンティスがいた。雪が降って寒かったのに、ゴットワルトは無帽だった。細やかな配慮の持ち主だったクレメンティスは、自分が被っていた毛皮のトック帽を取って、ゴットワルトの頭のうえに載せてやった。

党の情宣部は、毛皮のトック帽を被り同志たちに取り巻かれて民衆に語りかける、バルコニーのゴットワルトの写真を何千万枚も焼き増した。共産主義ボヘミアの歴史は、このバルコニーのうえで始まったのだ。どの子供もポスターや教科書、あるいは美術館などで見て、その写真を知っていた。

その四年後、クレメンティスは反逆罪で告発され、絞首刑にされた。情宣部はただちに彼を「歴史」から、そして当然、あらゆる写真から抹殺してしまった。それ以来、ゴットワルトはひとりだけ

ルコニーにいる。クレメンティスがいたところには、宮殿の空虚な壁しかない。クレメンティスのものとして残っているのはただ、ゴットワルトの頭のうえに載った、毛皮のトック帽だけになってしまった。

2

今是一九七一年。ミレックは言う、権力にたいする人間の闘いとは忘却にたいする記憶の闘いにはかならない、と。

彼はそんなふうに、友人たちから軽率だといわれていることを正当化しがっていた。つまり、彼が入念に日記をつけ、手紙類を保管し、状況を議論し、闘いをどのようにに継続すべきかを考え合う集会のすべてを分刻みに記録することを、である。彼は友人たちにこう説明していた、ぼくらは憲法に違反することはなにもしていない。逃げ隠れしたり、みずからなにか悪いことをしているように感じたりするなら、それこそ敗北の始まりになってしまふだろう、と。

一週間前、彼は工事中の建物のうえで建築作業員として働いていたところ、うっかり下のほうを見てめまいを起こした。バランスを失って梁のひとつにかまったが、その梁はあいにく補強が悪くて砕けてしまったので、仲間に助けてもらわねばならなかった。一見傷は重そうだったが、しばらくすると前腕のたんなる骨折にすぎないことがわかった。彼は、これから数週間休暇がもらえるから、時間がなくてこれまで取りかかれなかった用事をやっと片付けられそうだ、と思つて内心ほくそえんだ。

とはいえ彼は、慎重な仲間たちの意見にくみするようになった。憲法はたしかに、言論の自由を保証してはいる。しかし法律は、国家の安全を侵害するとみなされる一切の事柄を罰する。ところが、国家がいつ、しかじかの言論が国家の安全を揺るがすと叫び出すか、それはだれにもけつしてわかりはしないのだ。そこで彼は、人に読まれて困るような書類は、確かな場所に移しておこうと決意した。だが彼は、なによりもまず、ズデナとの一件を片付けておきたいと思った。彼女が住んでいる町に電話してみたが、連絡がとれなかった。そんなふうに四日間も無駄にしたあと、昨日やっと彼女と話すことができた。彼女は、今日の午後に彼を待っていると約束してくれた。

十七歳になるミレノクの息子は、ギプスをはめた腕で運転なんかできっこないじゃないかと言って反対した。そしてたしかに、彼は運転に四苦八苦した。負傷して吊り包帯をした腕は、役立たずのまま胸の前でぶらぶらしていた。ミレノクは、ギアチェンジするのにハンドルを放さなければならなかった。

3

彼は二十五年前にズデナと関係があった。その時期については、いくつかの思い出しか残っていない。

ふたりが会う約束をしていたある日のこと、彼女はハンカチで眼を拭き、鼻をすすっていた。どうしたんだいと尋ねると、前日ロシアのある政府高官が死んだのだと彼女は説明した。ジュダーノフだ

か、アルプゾフだか、マスツルボフだかという人物である。溢れてとまらない彼女の涙の量から考えて、そのマスツルボフとかの死は自分の父親の死よりずっとつよく、彼女の心を動揺させたものらしかった。

そんな事実が本当にあったのだろうか？ マスツルボフの死に際しての、その涙をでっちあげたのは、ただ現在の彼の憎しみにすぎないのではないか？ いや、そんなことはない。たしかにそうだったのだ。だが、当然のことながら、その涙を、現実の信じられるものにしていた当時の状況が、現在の彼には思い出せなくなっているために、その記憶もまるで戯画のように、ありそうもないものになっているのは事実だが。

彼が彼女についてもっていた記憶はすべて、そんな程度のものであった。たとえば、ふたりが初めて愛し合ったアパートから、彼らは一緒に市電で帰った（ミレックは、ふたりの性交のことをすっかり忘れてしまい、いくら思い出そうとしてもただの一秒も思い出せないのを確認して、とりわけ満足感を覚えた）。彼女は座席の隅に腰掛け、ガタガタ市電が揺れても不機嫌でとりつくしまもなく、驚くほど老けた顔をしていた。どうしてそんなに無口なのかと尋ねて、彼は、ふたりが愛し合ったその愛し合い方に彼女が不満だったのを知った。あなただけインテリみたいにセックスするのね、と彼女は言ったものだった。

当時の政治的な隠語でインテリというのは、侮蔑^{よべつ}の言葉だった。それは生活というものがなんであるかを理解せず、人民から孤立している人間という意味だった。その頃、他の共産主義者によって絞首刑にされたすべての共産主義者たちには、そんな侮蔑の言葉が投げつけられたものだ。大地にしつ

かり足をつけている者たちとは違って、連中は空中のどこかを漂っているような者たちだから、連中の足には刑罰によって大地が最終的に拒まれ、地上のやや上方に宙吊りにされるのも、ある意味で当然なのだというわけである。

しかしズデナが、インテリみたいにセックスするのね、と言って彼を非難したとき、いったいなにを言いたかったのだらうか？

彼女はなんらかの理由で彼に不満だった。ところが彼女は、もつとも非現実的な関係（自分の知らないマスツルボフとの関係）に、もつとも具体的な感情（涙によって物質化される感情）を染み込ませることができるような女だった。だから同じように、行為のなかでもつとも明白な行為に、抽象的な意味をあたえることもできたのである。

彼はバックミラーを見て、いつもと同じ一台の乗用車が自分のあとを走っているのに気づいた。彼は尾行されているのを一度も疑ったことがなかったが、これまでのところ、尾行者たちは模範的なくらい控え目に行動していた。しかし今日は、根本的な変化が生じていた。彼らは自分たちの存在に気づいてくれるよう望んでいるのだ。

プラハから二十キロばかり離れた田舎のどまんなかに、巨大な防御柵があり、そのうしろに修理工場のついているガソリン・スタンドがあった。気の合う友人がそこで働いているので、調子の悪いス

ターターを交換してもらおうと彼は思った。入口の前で車を止めたが、入口は赤と白のペンキで縞模様塗られた柵に塞がれていた。その脇に、太った女がひとり立っている。ミレックは、女が柵を取り除いてくれるのを待っていたが、女は身動きひとつせず、しげしげと彼を眺めただけだった。クラクションを鳴らしてみても無駄だった。そこで彼が車の窓から顔を出したら、女はこう尋ねた。「あなた、まだ逮捕されていなかったんですか？」

——いや、まだ逮捕されていません、とミレックは答えた。その柵を持ち上げてくださいますか？」

女は、さらに長いあいだ、うつけた様子でじろじろと彼を見ていたが、やがて、あくびをして詰所に戻ってしまった。そして詰所のテーブルのうしろに腰を落着け、もう二度と彼を見なくなった。

彼はしかたなく車を降りて柵を迂回し、顔見知りの修理工を工場まで捜しに行った。修理工がミレックと一緒に戻って、ミレックが車に乗ったまま中庭に入れるよう自分で柵を持ち上げてくれた（太った女のほうはいいかわらず、うつけた眼差しのまま詰所に座っていたが）。

「ほらみろ、あんまりテレヴィに出すぎたからだよ、と修理工が言った。あての女たちはみんな、きみの顔を知っているんだよ。」

——何者だい、あれは？」とミレックが訊ねた。

彼は、この国を占領し、いたるところに影響力を行使しているロシア軍のボヘミア侵攻が、その女にはこの世のものとも思われぬ人生の合図になったことを知った。女は自分より高い地位にいた人々（もっとも大部分の者たちはその女より高い地位にいた）が、どんな根拠のない申し立てによっても、

それぞれの権力、地位、職場、日々の糧などを奪われるのを見て興奮し、みずから他人を密告するようになっていたのだ。

「それにしちゃ、あいかわらず守衛をしているのは、どうしてなんだい？ 昇進はまだなのか？」

修理工は、にやりとして言った。「だって数を十まで数えることもできない女だぜ。だから連中だって、別の仕事をみつげようにもみつけれない。できることといや、改めて密告の権利を認めてやることぐらいさ。あの女にはそれが昇進でわけだ！」

修理工は、ボンネットを持ち上げてモーターを覗き込んだ。

突然ミレックは、自分の隣にひとりの男がいるのに気づいた。振り返って見ると、その男はグレーの上着に白のワイシャツ、ネクタイを締めて栗色のズボンをはいている。太い首とむくんだ顔のうえに、鉄ごとでカールされたグレーの髪が波うっている。男はしっかりと両脚で立ち、持ち上げたボンネットの下にかがみこんでいる修理工を見守っていた。

しばらくして、今度は修理工が男のいることに気づき、体を起こして言った。「どなたかお捜しなんでしょうか？」

太い首とむくんだ顔の男が答えた。「いや、だれも捜してなどいませんが」

修理工は、ふたたびモーターのうえにかがみこんで言った。「プラハのヴァーツラフ広場である男が吐いていたんです。前を通りかかった別の男が悲しそうにその男を見て、首を振りながらこう言ったそうですよ、あんたの気持ちがどれくらい私にわかってるか理解してもらえたらなあ……とね」

アジェンデの暗殺はロシア軍のボヘミア侵入をたちまち覆い隠してしまったし、バングラデシウの血なまぐさい大量虐殺はアジェンデのことを忘れさせた。シナイ砂漠での戦争はその喧騒でバングラデシウの呻き声を覆い隠したし、カンボジアの大量虐殺はシナイのことを人々に忘れさせてしまった。といったふうが続いてゆき、しまいには、みんながすべてをすっかり忘却してしまうことになる。

《歴史》がまだゆっくりと歩んでいた頃は、数少ない歴史の出来事はたやすく記憶に刻み込まれ、みんなが知っている背景を織りなしていた。その背景の前で、私生活のさまざまな冒険の、感動的な光景が繰り広げられていたものだった。ところが今日では、時間は大股ですすむ。歴史的な出来事は一夜のうちに忘れ去られ、翌日からはもう、新しい出来事の露となつてきらめく。だからそれはもはや、話者の物語のなかでは背景とはならず、あまりにも見慣れた私生活を遠景として演じられる、驚くべき「冒険」になってしまうのである。

みんなが知っていると仮定できる歴史的な出来事はひとつとして存在しない。そこで私も、数年前に起こった出来事を、まるで千年も昔のことのように語らねばならないのである。一九三九年、ドイツ軍がボヘミアに侵攻した結果、チェコ国家は存在しなくなった。一九四五年、ロシア軍がボヘミアに侵攻し、この国はふたたび独立共和国と呼ばれるようになった。人々はドイツ人を追い払ったロシアに熱狂して、チェコ共産党こそロシアの忠実な片腕だと見たために、ロシアにたいするみずからの

好意をチェコ共産党に移し変えた。

そのため、一九四八年二月、共産主義者が権力を奪取したとき、それは流血のなかでも暴力によつてでもなく、国民の約半数の歓呼の声に迎えられたのだった。ここで注意していただきたいのは、歓喜の叫び声をあげたその半数の者たちが他の者たちよりずっと活力も知性もあつて、善良な者たちだったことである。

そう、人はなんだって好きなことを言つていいのだ。共産主義者たちは他の者たちよりも知性があり、壮大な計画をもつていた。みんながそれぞれ自分の場所をみつけられるような、全面的に新しい世界というプランである。彼らに反対する者たちは偉大な夢をもたずに、ただ使い古された退屈な原則をいくつかもっているにすぎない。そしてそんな原則をもちいて、既成秩序という穴のあいたパンツをなんとか繕いたがつているだけなのだ。だからそれらの熱狂者たち、勇敢な者たちが微温的で慎重な者たちに易々と打ち勝ち、たちまち自分たちの夢、みんなのための正義という、あの牧歌を実現しようとして企てたとしても不思議ではなかった。

私は「牧歌」と「みんなのため」という言葉を強調する。というのも、どんな人間存在もずっと牧歌を、ナイチンゲールの歌うあの庭を、あの調和の王国を熱望しているものだからである。そこでは、世界が異物として人間に立ち向かうことも、人間が他の人間に立ち向かうこともない。それどころか、世界とすべての人間が同じひとつの材質で造られている。そこではめいめいが、バッハの崇高なフーガの楽音のひとつひとつになるのだ。そうなりたくない者がいるなら、そんな者などずっと無益で無意味な黒点としてとどまり、蚤^蚤みたいに爪先で捕らえて圧^{おさ}しつぶしてやれば充分ということになる。